

## 砥石山のはなし

最近、天然物の砥石の使用をあまり見かけなくなつた。人工の砥石がこれに代わっている。先日、共有山の間伐で、一緒に行った人が珍しく天然物の砥石でナタを研いでいた。「この近くの川で拾つた」「ちよつと形を直せばよく研げる砥石になる」と言っていた。

神田地区は、昔から「名倉砥」と呼ぶ砥石をよく使っていた。神田川の支流にイナメ川があり、その上流に地元の人が「砥石山」と呼ぶ砥石の産地があつたからだ。前途の「拾つた」というのは、このイナメ川である。

ここで、神田の砥石について、

少し述べてみたい。参考にしたのは「三州神田覚え書き」（原田武著）所載の「名倉砥」である。産地一帯は神田地区と旧鳳来町川合地区、東栄町月地区にまたがっている。江戸時代は幕府直轄の「御林」、明治時代から「皇室御料林」、太平洋戦争後は「国有林」となり、地元の人には「官林」と呼んでいる。

「名倉砥」は異名を「三河白（みかわしろ）」ともいうが、これは、川合地区で主に採掘される白色の固い仕上砥で、神田地区のもの、主として卵白色で「虎斑（とらふ）」という斑があり中砥として用いられた。「名倉砥」は刀剣を研ぐのに最良とされた。

「名倉砥」と呼ぶわけは、「昔、名倉村を切り開いた名倉右近と

いう人が、狩りの途中、この地で矢じりを研ごうとして、この石を発見し、優良なことだから、以後『名倉砥』と呼ばれるようになった」という説がある。

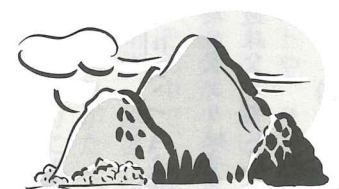
神田での採掘は、江戸時代の寛延三年（一七五〇年）の古文書があるが、この頃か、それ以前からかはよくわからない。

採り出された原石は鋸で成形され、人の背で背負い下ろされた。その後「馬追い」によつて海老まで運んだという。（大正時代が盛んであつた）。

なお、川合地区は坑道で採掘し、神田地区は露天掘りであつた。（神田地区の採掘は、昭和二十年代の終わりごろには、廃絶したようである。）

（設楽町文化財保護審議委員）

金田喜兵衛



露天掘りの跡



砥石を背負い下ろした人たちの休み場

### 設楽町文化協会への加入、お待ちしています

現在加入しているクラブ数は三十一。幼児から八十代までと年齢層も広く、それぞれ生活に張りとも楽しみをもつて活動しています。町の文化祭には、活動の成果を展示したり、発表したりして皆様にご覧いただき、それがまたクラブ員の励みにもなっています。

そこで、同じ趣味を持つて仲間であらう活動してみえる方々、ぜひ文化協会へ加入して、活動の輪を広げませんか。手続きは簡単です。教育委員会へご一報をお願いします。

連絡先 教育委員会

62-11105